

よきことを、よきひとへ。
被災地復興に取り組む人のための業界新聞
http://www.rise-tohoku.jp/
発行所 NPO法人 HUG
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-10-9-8 F
http://www.h-u-g.jp e-mail: info@h-u-g.jp

東北復興新聞

無料 第14号
月2回 発行
創刊 2012年(平成24年)1月16日 月曜日

2012年(平成24年)8月20日 月曜日

◇◇◇◇ 仙台七夕祭り ◇◇◇◇

仙台の夏の風物詩になっている「仙台七夕祭り」が8月6日から8日、仙台市で開催された。豪華絢爛な笹飾りは一般市民が毎年新たに作成することでも有名で、今年の見物客は2百万人にのぼった。

中でも注目を集めたのが、仙台空港に飾られた約4千枚の円状の短冊だ。子どもたちが自

身の夢を描いたもので、被災地のみならず、関東や九州、また国外からも集められた。短冊をつくるワーク

「南三陸福幸きりこ祭」を開催する。地域を支援してきた商店や企業の物語を神棚飾りである「きりこ」で表現・展示することで、地域の記憶や文脈を後世に伝えたいという。アートや文化を復興に役立てようとする動きが今、各地で進んでいる。

また、宮城県南三陸町では8月25日から

【関連記事4・5面特集】

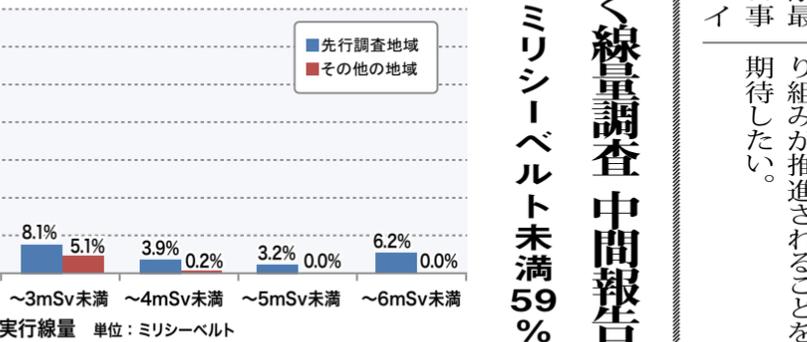
工程表における各市町村の概況	生活インフラ (上下水道、道路など)	産業インフラ (農地・農業用地など)	公共施設 (教育、医療、役場施設など)	除染	災害廃棄物処理
南相馬市	2012年度中に完了	2013年度中に宮農再開を希望する農地については速やかに復旧	2013年度中に建物修繕を完了	実施中	仮置場の整備、搬入を調整中
田村市	道路は2012年度中に完了、上下水道等は大きな被害なし	農業用水および農道の工事を2012年度中に完了	2012年度中に修繕は完了、除染を行う	先行除染は実施済み	2012年度中の調査で災害廃棄物の発生状況を把握
川内村	概ね完了	2012年度中に工事	2012年度中に復旧工事	先行除染は完了 住宅は一部完了 2014年度までに仮置場3か所を設置	2012年度中の調査で災害廃棄物の発生状況を把握
広野町	2012年度中に下水道復旧工事を完了	2013年度中に工事	復旧工事中または完了し、除染済み 概ね再開準備中	計画は策定済み	国の代行について調整中

今後3年の見通しを可視化
公表された工程表では、区域見直しにより避難指示解除準備区域などが設定された南相馬市、田村市、川内村、広野町の4市町村について、今後3年のインフラ復旧の見通しが事業ごとにまとめられた。対象となったのは、国、県、市町村、事業者の枠組みを越えて全体の

南相馬市については、応急的な対応が求められる道路、上下水道、区役所などの整備を今年

広野町においては、道路や上下水道がすでに復旧済み。今後は、河川対策を含めた津波被災地の整備にあたる。

福島県は13日、全県民を対象として実施している「県民健康管理調査」から、事故後4ヶ月間の外部被ばく線量推計値を発表した。前回公表の6月から新たに1万1094人を追加し、累積3万6761人分のデータの分析結果となった。



福島県

インフラ復旧工程表を公表

避難指示解除準備区域の4市町村で
復興庁は7日、原発事故の影響で避難指示解除準備区域などに設定された福島県内の4市町村における公共インフラ復旧の工程表をまとめた。帰還を目指す区域内の住民や関係機関に、今後3年の復旧の見通しを共有することがねらい。

今後3年の見通しを可視化

復旧が時間軸で「見える化」されたことで、避難住民や関係機関との情報共有の円滑化が期待される。さらに工程表では、今後区域見直しなどの節目ごとに、工程表を作成する対象となる市町村の拡大や対象事業の拡充を行う方針も同時に示された。

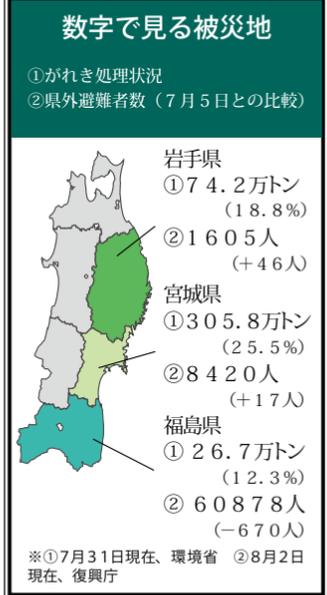
応急的対応は今年度中に完了

南相馬市については、応急的な対応が求められる道路、上下水道、区役所などの整備を今年

度中に終える見込み。多くの事業は、今年4月に警戒区域が解除され避難指示解除準備区域に再編された小高区において実施される予定。

田村市は電気や上下水道に震災当時から大きな被害はなかったとして、主に道路復旧を今年度中をめどに終えるとして、すでに3月26日に行政機能が再開している川内村は、住民の帰還促進のために今後の最優先課題を除染とした。さらに道路の復旧、生活環境および商業・観光施設などの整備に取り組む予定だ。

インフラ整備と並行した、住民と地域の産業を支える取り組みが推進されることを期待したい。



福島県 外部被ばく線量調査 中間報告

1ミリシーベルト未満 59%

セクターの垣根を越え、より専門的に、より熱く……
東北復興新聞が企画・監修・運営する、
復興現場で活躍するリーダーたちのオピニオンサイトがオープンしました。



— 灯ろう、明日へ。 —

灯ろう、明日へ。

検索

減少するボランティア 継続どのように

全国社会福祉協議会被災地支援・災害ボランティア情報によると、震災後のボランティア数は、去年5月に比べ今年7月には8分の1まで減少している。被災地からボランティアが減少していくなか、継続して支援活動を行う団体にとって、ボランティアの確保が大きな課題となってきた。

生徒とボランティアの「マッチング」に工夫

東京と被災地で学習支援を行うNPO法人キッズドアは、被災地で学校や教育委員会と連携した学習支援に、今までのべ2000人以上のボランティアを動員してきた。「スキルを持った個人がボランティアとして活躍できる環境を整えることが重要」と、事務局の片貝さんは言う。注力しているのは「コーディネート」。

特徴を踏まえ、適切な講師を選択・派遣する。この工夫が、子供たちの学習意欲の向上につながるという。「生徒たちが「授業をしてよ」と言ってきたり、宿題に取り組む習慣がついてくると、自分たちも頑張らなくてはと思います」とボランティアの伊藤さんは話す。生徒たちの意欲や成長が、ボランティアの継続参加意欲を引き出している。

役割をつくることもポイントだ。キッズドアでは、講師としての業務だけでなく、団体の運営も積極的にボランティアに任せている。同団体の学生ボランティアの浅川さんは、事務局と密に連絡を取り合いボランティアリーダーとして学習

会の運営そのものに関わる。現場では他のボランティアをまとめる立場だ。活動を通して自身の成長も感じられることと、「現場に求められ、それに応えたい」という想いが、継続的に活動する動機になっているという。

ボランティアのネットワークづくり

岩手県の被災地支援ボランティア

活を共にしたスタッフがおり、再び参加する時には知っている顔がいる。親しみやすい現場の雰囲気、継続的参加を促している。また、活動を通じてでき

キッズドアや遠野まごころネットワークでは、ボランティア活動の体制や対象が大きく異なる。しかし、継続的な支援に焦点を当てると、共通点も見えてきた。被災地復興と共に、ボランティア達も自身の居場所を見つけ、成長・自己研鑽していく。こういった価値を与えられることが、ボランティアを定着させる鍵になっている。



被災地で学習支援を行うボランティア。その多くが元教員や塾講師経験者



●ジャパン・ソサエティ東日本大震災復興基金(ローズファンド)「第3期助成プログラム」

現在受付中の
補助金・助成金
情報



【助成プログラム】A:復興支援事業助成、B:復興支援事業に取り組む現地NPOの組織基盤強化のための助成

【助成対象】岩手県、宮城県、福島県において非営利の団体が行う復興支援事業全般。現地のNPO等

団体が長期的に活動する組織基盤を強化するための取り組みを重視し、最長2年間の継続した助成を行うため、2年以上継続して実施する見込みの事業が助成対象となる。その他の要件はホームページから確認できる。

【助成期間】2013年1月1日から2013年12月31日に実施される12か月間の事業

【助成金額】上限250万円(プログラムAの場合)

【応募方法】書類一式(ホームページからダウンロード)を郵送

【応募締切】9月14日(消印有効)

【HP】http://www.sanaburifund.org/info_rose/2012/08/01/5249/

●NPO法人遠野まごころネット「まごころサンタ基金」

【対象】平成24年度に大学、短期大学ないし専門学校に進学し、在学中だが、東日本大震災の際、保護者が岩手県内で被災しているため学業の継続が困難な方(被災後岩手県外へ移住された方や過去のまごころサンタ基金奨学生も応募可)。

【奨学金】奨学生1人につき10万円。学業継続のためであれば、学費でも生活費でも用途は問わない。返済義務なし。

【募集人数】100名。今後まごころサンタ基金によせられる寄付金の額に応じて増員もありえる。

【応募方法】応募書類一式を「〒028-0528岩手県遠野市大工町10-10 NPO法人遠野まごころネット奨学金担当あて」まで郵送(封筒の表に「奨学金応募書類在中」と明記)。

- (1) 氏名、住所、電話番号、通学先、奨学金を必要とする事情を記した応募票(任意の書式。A4・1枚)
- (2) 在学証明書
- (3) 保護者の罹災証明書のコピー
- (4) 返信用封筒(長形3号。宛先に自身の住所と氏名を書き、80円切手を貼付)

●総務省東日本大震災復興対策「被災地域情報化推進事業」第4回申請

【対象団体】東日本大震災復興特別区域法の特定地方公共団体(一部事務組合及び広域連合を含む。)またはこれらを含む連携主体。

【対象事業】特定地方公共団体等が抱える課題を情報通信技術(ICT)の活用を通じて効率的・効果的に解決する取り組み。

【応募方法】ホームページのマニュアルに従って必要書類を作成の上、郵送または持参

【応募締切】8月31日(金)午後2時必着

【HP】http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01tsushin01_02000059.html



<http://h-u-g.jp/>

HUG

伝える。変わる。手をつなぐ。



NPO法人 HUG

Projects

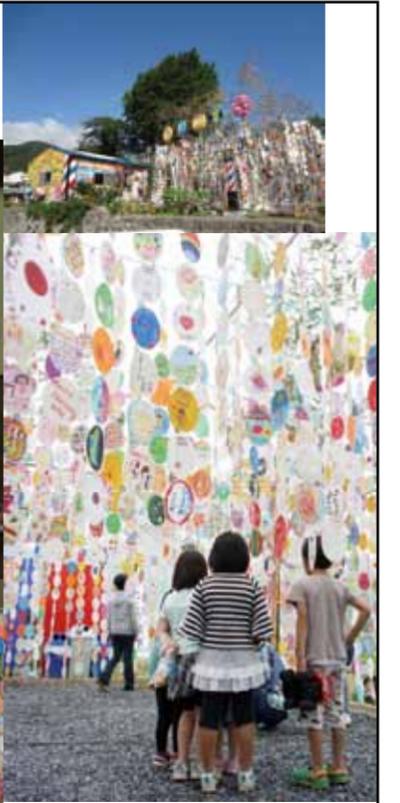
復興関係者のための業界紙「東北復興新聞」の発行
メディア連携による東北スタディツアーの企画
地域新聞の立ち上げ、運営、サポート and more...

Our Mission

HUGは、世の中を良くするために世界中で頑張っている人や団体を、情報発信等のコミュニケーションの分野で手助けする中間支援組織です。素晴らしい人や取り組みをHUGが媒介となって世の中へ届けることで、人と人が笑顔でつながり助け合う社会の創造を目指します。

About Us

NPO法人 HUG
東京都渋谷区代々木2-10-9-8F
代表理事：本間勇輝
理事：岐部淳一郎、金田喜人
E-mail: info@h-u-g.jp



昨年及び今年の七夕プロジェクトの様子。今年の七夕祭りには4千枚の短冊が寄せられた。



飾る短冊を
とにかく沢山の
人に描いて
もらう活動だ。
昨年8月の七
夕祭りには、
避難所の子供
たち5百人が

1 アートの力 宮城県ほか 七夕プロジェクト アーティスト・ミヤザキケンスケさん

震災から500日経ち、マスメディアによる報道も大きく減少している。震災は確実に「現実」のものとして続いており、被災地に住む人とそうでない人には大きな認識差がある。このような立場・認識の異なる人同士を「つなげる」のが、アーティスト・ミヤザキケンスケさんの「七夕プロジェクト」だ。

短冊を通じて被災地を想う時間を

仙台では毎年8月に七夕祭りが開催される。伊達政

宗の時代から続くといわれるこの祭りは、地域や個人が作った豪華絢爛な笹飾り特徴とする。

ミヤザキさんの七夕プロジェクトは、このお祭りに

「何を描いたか」より「どう描いたか」
今回の活動のきっかけは、過去にケニアで行ったアートイベントにあるとミヤザキさんは言う。スラム街にある小学校の壁画を描くプロジェクトで、自分だけで



「何を描いたか」より「どう描いたか」
「現地」に足を運んだ人は、例えば屋台村が出来ただけでも一緒に喜べる。でも知らないとその喜びを共感できないから忘れていく。現地の方が恐れているのは、忘れられることなのではないでしょうか」
共感の第一歩に「つな

被災地に想いを馳せることと考えるミヤザキさんは「想う」行為が「人と人のつながり」を生むと考えている。足を運んだことのない地域、会ったことのない人に想いを寄せることは一見難しく感じるが、「短冊を描く」という行為が、その敷居を下げてくれるのかもしれない。

なく、子どもや先生、地域の住民にも絵を描いてもらった。それが全員の参加意識を生み、結果として壁画はその後も「みんなの絵」として地域で愛されているという。ミヤザキさんはこの経験を通じて「なにを描いたかではなく、どう描いたかが重要」と感じ、七夕プロジェクトに同様の手法を持ち込んだ。

2 アートの力 宮城県南三陸町 「南三陸 福幸きりこ祭」 記録ではなく、記憶を伝える

震災以降、各所でアカイブ活動が行われている。がれき処理、物資の管理・分配、避難所運営・・・記録はたくさんあるが、皆さんの教訓を伝えてくれるが、地域が本当に伝えたいのは「記録」より「記憶」なのかもしれない。町の中心が大きな被害を受け、町外避難者の多い南三陸町では今年、「記憶の継承」に挑んでいる。

震災前の南三陸町志津川地区。住民の生活を支えた商店一つひとつに「きりこ」が飾られた。写真提供：ENVISI



「南三陸 福幸きりこ祭」は、商店の軒先に、店のモチーフを切り抜いたきりこを飾るプロジェクトだ。観光に力を入れていた南三陸町が2010年、地元商店の魅力を知ってもらうために始めた。店の生い立ちや店主の考えをまとめた「ストーリー」も合わせて展示し、観光客との会話のきっかけにしようとしていた。

伝統のきりこが地域の情報発信ツールに

三陸地方の神社では、正月の神棚飾りのため、縁起のいい模様を切り抜いた半紙「きりこ」を配布する風習がある。漁業がさかんな南三陸町では、大漁や漁の安全を願い、一年を通して「きりこ」を飾る家も多いという。



震災を経た今年、「さんさん商店街」をはじめとする仮設店舗で同じ活動がスタートしている。趣味で手製の耳かきを配っていたという床屋には「はさみと耳かき」、会社帰りの父親向けに200円のケーキを販売し

集 役割を考える の力 興を後押しするか～

文化芸術による「心の復興」事業に17億3千... (生きる希望や勇気)をもたらすとともに、を生ま出すこととされている。芸術は、復興に



ていたケーキ屋には「ケーキとネクタイ」のきりこを製作。加えて、「海と桜並木が見える美しい公園のそばにあった」「南三陸町に商談に来る市場関係者に、料理を振る舞った」など、商店それぞれに流れるストーリーも合わせて掲示する。

町の文脈を次世代に伝える

2010年の活動は、観光地・南三陸町を盛り上げ、発展させるために実施した。今回も町の未来をつくるための活動であることは変わらないが、主催である「町の吉川由美さんは「町の文脈を次世代に伝える効果があるのでは」と語る。南三陸には「生まれも育ちも南三陸」の住民が多く、「町の文脈」は言語化せずとも伝わる環境にあった。しかし津波により「町が丸ごと流出した」いま、住民の多くは町外に避難する一方で、支援者などの町外訪問者が増えており、「新しい文脈」も生まれつつある。



フィールドワークの様子。町を歩きながら、野点の実施場所を検討している。



福幸きりこ祭」は8月25日、商店街をはじめとする南から9月11日まで、さんさん三陸町一帯で開催される。

立ち止まる時間をとる
3
岩手県大槌町
「ひよっこりひよったん塾」
アートのカ▶

復興関連事業の動きが加速している。高台移転も防潮堤建設も「待ったなし」。でも全力で走れば走るほど、失われるものもある。復興の文脈では「当たり前」に思われていた「スピード」というコンセプトに疑問符を投げかけ、あえて「ゆっくり進む」ことの価値を提唱するのが「ひよっこりひよったん塾」である。

意思決定のプロセスを住民と共に

岩手県大槌町では芸術文化によるまちづくり人材育成事業「ひよっこりひよったん塾」を運営し、地域の復興を担う人材を育成している。大槌湾に浮かぶ小さな無人島・蓬菜島をモデルにしたと

言われる「ひよっこりひよったん島」から名をとった。

この活動は、「芸術文化まちづくりゼミ」と名付けられたセミナーと、アーティスト・きむらとしろうじんじん氏が行う野点(のだて)と呼ばれる「移動式陶芸お抹茶カフェ」の実施準備をするフィールドワークで構成される。野点とは

移動式カフェを利用した「屋外のお茶会」のようなもので、付帯された陶芸窯で茶碗を焼いたり、その茶碗でお茶を飲むなどの場を指す。東北でいう「お茶っこ」のようなものだが、実施場所や関わる人によって全く異なる場と時間を醸し

出すことなどから、主催団体のひとつである東京都歴史文化財団はこれを文化事業と位置づけている。しかし、「お茶っこ」がなぜ人材育成につながるのか。実施するためには実施日や場所の検討、ロケハンや導線確認などの準備が必要だ

が、これらを主催者ではなく住民主体で行うことで、OJTスタイルの人材育成を図っているのだという。例えば、野点の実施場所について、主催者側の議論では津波を想起させない場所も検討していたが、海と生きてきた大槌町の住民らは、時間をかけて議論した結果、海が見える場所も候

な時間を送る土壌がある。東京都歴史文化財団の森司さんは「地域に持ち込まれたイベントではなく、準備段階からじっくりと関わってもらい、本番までの時間も楽しんでもらえたら」と

特 復興におけるアート

～芸術・文化は復興

政府は平成24年度予算の「被災地における」万円を計上した。その効果は住民に「心の復興地域の絆が一層再確認され、復興への活力をどのように寄与し得るのだろうか。被災地で

補地に挙げたという。「高台移転先はどこがいいか?」と聞かれると口ごもる住民も、「どこでお茶を飲みたいか」という問いには答えられる。性別、立場、スキル、経験問わず、誰もが活動の当事者になれる点に、文化事業を介在させる意味があるのかもしれない。

「お茶っこ」実施に1年準備時間にも価値がある

とはいえ、少し時間をかけすぎでは、と感じる節もある。構想が持ち上がったのは昨年夏だが、現地調査を経て活動内容を決めたのは今年4月。場所の選定、自治体の交渉などを開始したのは6月で、野点の実施は9月末なので、「お茶っこ」の実施に1年かけた計算になる。

マイタウンマーケット

福島県相馬郡新地町の仮設住宅に「1日限りの小さな町」をつくりあげること、ふるさとを想う気持ちをカタチにするプロジェクト。大人と子供が思い思いに「町のパーツ」を表現したお店を出し、それらを市場のように並べて「町」を手作りする。

未来を歌に

宮城県南三陸町にある5校の小学生による、歌づくりプロジェクト。子どもたちがメンタルダウンを起こさないよう、震災当時の記憶を歌としてアウトプットし、心に沈殿させない効果を狙った。

考えているという。時間は、誰にも平等に流れていく。でもアートや文化が介在することで、その時間は豊かなものに変わるのかもしれない。

これもアート! 心を豊かにするプロジェクト

女川常夜灯「迎え火プロジェクト」

8月13日に宮城県女川町で実施。震災の記憶を次世代へ繋ぐことを願い「小さな火を囲み語らう時間」を女川の年中行事とすべく地元住民が発案。美術家の小山田徹ら「対話工房」が共に企画した。地盤のかさ上げを前に、各々の自宅跡地に「迎え火」を灯す。

取材後記

経済指標には表れないアートの価値

復興の現場で、アートはどんな力を発揮するのか。アートイベントの主催者や文化事業を推進する団体など多くの方々に、質問させて頂いた。

瀬戸内海に浮かぶ直島のベネッセアートサイト、新潟県の越後妻有アトリエンナーレは、アートが地域おこしや観光客誘致に寄与した好事例だ。東北にもこのようなケースがあるのでは、と取材を繰り返したが、予想に反し取材をしたすべての活動は観光や雇用などの経済的指標ではなく、むしろ「心を刺激する何か」という曖昧模糊としたものに期待を寄せていた。

地域活性化におけるアートの可能性を調査した参議院第三特別調査室の小林美津江氏は、アートの経済的価値を大いに認めつつ、「文化芸術は地域活性化のための施策とは無関係に、多様な価値観を持ちそれ自体が目的となる」としている。「文化芸術により地域のアイデンティティや魅力を確立し、情報発信することで、住民が誇りを持ち、人々からここに住みたいと選ばれるようなまちづくりに繋げていけるというのだ。

アートというと、美術館のガラスケースの中にあるもの、身なりを整えて鑑賞に行くようなものを思い浮かべがちだったが、本来はもっと身近に、生活に寄り添ってあるものではないかと気づいた。例えば一枚の大漁旗。船主の無事を祈り豊漁を願う気持ちが、縁起物の意匠や鮮やかな色で表現されている。これも立派なアートだろう。

アートは生きることの記録であり、制作、鑑賞は他者と生き様を分かち合う行為ではないか。そして、アートが生み出す「生への動機」や「共感」は、被災地内外の多くの人が協働して取り組むべき復興の長い道のりに、不可欠なものの一つなのではないだろうか。そのように感じた。(齋藤麻紀子、畔柳理恵)

※「アート」の定義は様々で「文化」「芸術」と表現する企業や団体もありますが、本紙では引用部以外はすべて「アート」で統一しました。

集団移転の先進事例

地域の良さを 将来へ引きつぐ

― 気仙沼市小泉地区の取り組み ―

津波被害で518世帯のうち266世帯が流出・全壊した宮城県気仙沼市の小泉地区。昨年6月には集団高台移転を目指す協議会が設立、年末には120戸以上の合意を得るなど、スピーディな動きが注目されている。集団移転の先進事例とも呼ばれる小泉地区の成功要因はどこにあるのか。

図面や模型を用いず まちづくりの議論を

小泉地区において議論がスムーズに運んでいる要因として、まず挙げられるのが震災前から存在した強いコミュニティだ。普段から家に鍵はかけず、

帰宅すると冷蔵庫に野菜が入っていることもあったとか。集落ごとに自治会組織があり、議論する風土も根付いていたという。

「奥尻島のコミュニティ面での課題があることを把握していた。」



小泉地区の移転計画づくりをサポートする北海道大学の森保教授。大阪で阪神大震災を経験。被災者としての経験と現在行っているコミュニティの研究が、小泉地区での活動につながった。

しかし仲が良いだけでは、100世帯超の合意形成は難しい。盤石なコミュニティに適切な目標設定をしたのが、建築とコミュニティの関係を研究する北海道大学の森保教授だ。森教授は震災直後、津波による集団高台移転事業としては当時唯一の事例だった奥尻島を調査スピード移転を実現し

た奥尻島にコミュニティ面での課題があることを把握していた。「奥尻島のスピード対応は、住宅を失くした住民に大きな安心感をもたらしました。一方、復興事業計画にコミュニティ維持の観点が十分には反映されておらず『回覧板を回すときしか顔を合わさなくなつた』という言葉も聞かれました」

設計事務所の紹介で小泉地区を訪問した森教授は「奥尻島で出来なかったことを実践すべき」と考え、集団移転の目標を「自宅再建ではなく『数十年後のまちづくり』に設定するよう提案。その後は住民を集め、『将来に引き継ぎたい小泉地区の良さ』を考えるワークショップ

プを2ヶ月に渡って開催した。通常、集団移転の議論では、図面や模型を前に家の配置を決めていくが、「まちづくり」という目的を見失わないよう、最初の3ヶ月はそれらを議論の場に持ち込まなかったという。小泉地区の集団高台移転を進める「小泉地区 明日を考える会」事務局長の加納保さんは、「おかげで目的がブレなかった」と振り返る。

この手法が過疎化対策にも有効だと、森教授は推察する。小泉地区は高齢化率31%と震災前から人口減が進んでいたが、地区の個性を町に分かりやすく表現することで関心や共感を寄せる人が現れ、人口流入の可能性がある」と指摘する。

また小泉地区では現在125世帯が集団移転の意向を示している。賛成世帯数が、公民館やバスの停留所などの公共施設が配備される目安の100世帯を超えている点も、過疎化を阻む要因になるという。周辺の地区で人口減が起こった場合、公共施設のある地域に統合される可能性が高いからだという。

小泉地区の事例は、ベースにあつた強いコミュニティに加え、1年もの時間を議論に投じることで生まれたもので、他地区で拙速に応用できるとは言い難い。しかし自身の利益ではなく町の個性と将来を見据えた議論のあり方は、復興過程の様々なシーンで大切な姿勢と言えるだろう。



(上) 被災した小泉地区の一部。この一帯は「小泉地区」と呼ばれていたが、近くに「陸前小泉」という駅はあるものの、「小泉」という住所ではないという。「小泉地区の住民は、行政区ではなくアイデンティティによって結びついていたのでは」(森教授)
(右下) 移転計画案。車道が配されたのは外周のみで地区内は歩いて移動する。裏道づたいに行き来する住民の行動特性を町に表現した。
(左下) 小泉地区の住民が避難した小泉小学校。3月11日の教を次世代に伝えるべく石碑が建てられた。

地区のDNAを町に表現 過疎化対策にも期待

個々の利益ではなく 町全体の将来のために



「支える人を支える募金」です。赤い羽根。

東日本大震災の被災地における支援活動を支援するため、「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」を運営しています。

- 寄付や助成のお申し込みはこちらから
www.akaihane.or.jp
- 6月1日(金)から第8次の助成応募を受け付けています。締め切りは6月29日(金)

ボラサポ公式 Facebook ページ
「ボラサポ facebook」で検索。耳寄り情報を毎日更新中

ボラサポ・メールニュース
登録は www.akaihane.or.jp から

問合せ先

中央共同募金会 企画広報部(ボラサポ担当)
TEL: 03-3581-3846 (FAX: 3581-5755)
support@c.akaihane.or.jp

赤い羽根の中央共同募金会

復興プロダクト



ギャザーバッグ
GANBAARE

長の清水敏也さん。震災で営んでいた水産加工の工場が大きな被害を受けたが、一

「何か、きっかけを作らなきゃ、と思っただんです」とGANBAARE(ガンバーレ)社

伝統の「帆前掛け」をバッグに

念発起。気仙沼のために仕事と元気が生まれる場所を作ろうと同社を設立した。古くなった船の帆を使い、腰に巻く「帆前掛け」は、気仙沼で昔から受け継がれている大切な、働く姿の象徴。シート制作や縫製技術を持った職人さんと共に、帆前掛けを復活させ、そこからバッグやポーチなどに商品が広がった。やまつつじや黒松、うみねこなど、気仙沼らしい柄が染め抜かれる。現在はネット販売に加え、「ギャラリー」「縁」での店舗販売も行う。

清水さんは語る。「店ではお客さんにお茶やお菓子をしてお出し、のんびりお話をしているつもりです。話の中で商品のアイデアが生まれるし、何より喜ばれていることを工房で働くスタッフも実感できるのです。GANBAAREは、これからたくさんのお客さん、小さなお仕事をしていきたいと思っています。百人の会社を一つ作るより、10人の働く場を10個作る方がいい。たとえ小さな場所でも、一人ひとりが活躍できる場所があること、それが生きる力になるのだと思います」。

■ギャザーバッグ2800円

株式会社 GANBAARE

http://www.ganbare.jp/



願い・希望・感謝 8月6～8日に開催された「仙台七夕祭り」。色鮮やかな吹き流しが仙台の街を彩り、短冊には全国から復興への思いがこめられた。

南三陸「復興市」に見る復興イベントの役割

地域をつなぐ。未来へつなぐ。

今年7月に開催16回目を迎える宮城県南三陸町の「復興市」。昨年4月より毎月開催され、来場者は平均約1万人、多いときで2万人にものぼるといわれる。震災から1カ月半というスピードで開催に至った背景には、「震災前からの『ぼうさい朝市』ネットワークの存在があります」と復興市実行委員会事務局の首藤史明さんは語る。「おさかな通り商店街」で



商品が届けられた。これが、復興市の早期開催に結びついた。震災直後、買い物場のなかつた町民に、復興市は大変重宝されたという。現在に至るまで継続されているのは、それが単発の「祭り」ではなく、定期的

に開催される「市」であることが大きい。当初から実行委員会では、町民の生活を支える場として復興市を位置付けてきた。開催から1年は、出店者・来場者ともに町民の割合が大半を占めていたことから、復興市がその機能を果たしてきたことがうかがえる。

復興市は来年3月までの開催が決まっている。首藤さんは「震災前のイベントが従来通り開催されるまでの橋渡し」というが、復興市は、間違いなく南三陸町の日常を取り戻す礎となってきた。非日常から日常へと日々をつなぐこと。そこに復興イベントの二つの役割があるといえるだろう。

この夏、とんでもない青年と出合った。松嶺貴幸、盛岡市在住の26歳。高校生の時、フリースタイルスキーの練習中に転倒し、脊椎を損傷。肩から下が動かず、電動車椅子を肩の筋肉でコントロールして生活している。何でも食べるし、よく喋るし、酒も飲むが、自身の体温調整は上手くできない。そんな彼は絵を描き、ウェブのデザインをしている。これが、信じられないくらい良く出来ている。

素人目に、障害を持つての上手いね、と言っているのではない。十年以上、制作の現場で見て来た、あつこの人すごい、と思うクリエイターのレベルと同等に、その作品が素晴らしいのだ。とても口にスティックを咥えて描いたとは思えない。本当の、ホンモノだ。

彼が絵を描くようになったのは、障害を持つてから。恐らく、怪我がなければ、今のうちに絵を描くことは無かつただろう。四肢麻痺という試練が、彼の才能を開かせた。怪我は多くを奪い、新しい気付きを与えた。

東北で、新しい人生を歩もうとしている方々にお会いする機会が多い。今までの生活が失われ、初めての仕事にチャレンジする人、また今までの価値観を捨てて東北へ移り住む人もいる。すべての挑戦は美しく尊い。自分もそうでありたいと、改めて思いを強くした。(T)

イベント・インフォメーション

●心を繋ぐハッピーメンタルケア
“自分は自分で大丈夫”と思えるようになる考え方や実践の仕方をわかりやすく伝える。【日程】互理(てしごとプロジェクトWATALIS事務所内):8月25日(土)、仙台(Flower Studio KILLA内):8月26日(日)【時間】10:00~12:00【申し込み先】日本ピアノセラピー協会現地協力団体 TEL:080(1234)9785、Eメール: blessing.megumi@gmail.com

●第7回 社の部のビール祭り
『仙台オクトーバーフェスト2012』
“本場ドイツのビール・料理・音楽”に、“東北ならではの食材とアーティスト”を加え、「日本とドイツの交流」と「地産地消」を通して、「地域の活性化」を図る祭典。【日時】9月14日(金)~23日(日)11:00~21:00(平日は16:00~)

所)錦町公園(宮城県仙台市青葉区本町)【問い合わせ】仙台オクトーバーフェストプロジェクト TEL:022(714)8324【HP】http://www.sendai-oktoberfest.jp/

●福島県立美術館 移動美術館
南相馬市で開催。相双地区ゆかりの作品など、日本と世界の名作約30点を展示するほか、世界各地から福島に寄せられた応援メッセージの書かれた贈り物を展示する。【日時】9月23日(日)まで(月曜休館)【場所】福島県南相馬市博物館【料金】大人300円、高校生200円、小中学生100円、無料開放日あり【問い合わせ】福島県南相馬市博物館 TEL:0244(23)6421

※イベント情報随時募集しています。掲載ご希望の方は press@h-u-g.jp まで。

「知る」という支援がある。

東北復興新聞の制作・印刷・発送は、皆様からの協賛で支えられています。「よきことを、よき人へ」伝えるために。どうぞご支援をお願いします。

■お申し込み方法

- Web : http://www.rise-tohoku.jp/
- Eメール : assist@h-u-g.jp
- FAX : 03-6869-0151

1 東北復興新聞サポーター 【8,000円/年】

毎号2部をお届けします。(ご友人・同僚の方にも)

2 東北復興新聞パートナー 【30,000円/月】

毎号100部をお届けします。(会社の皆様でどうぞ)

MENU